

# 迷いのない学習環境

岡野 太郎

第62回国立病院総合医学会  
(平成20年11月12日 於東京)

IRYO Vol. 63 No. 10 (641-644) 2009

## 要旨

看護学の知識、高度な看護技術を身につけ患者に寄り添い、患者の絶対的な力になれる看護師を目指している。看護学生として、望む支援は、「迷いのない学習環境」である。これは、1. 学生が実習中に経験のできる看護技術の把握と看護技術習得の基準統一、2. 実習指導者と教員の受け持ち患者と学生の情報についての共有、3. 患者への一貫した継続看護の重要性の学びの場の提供である。各実習ごとに自分たちが経験できる看護技術を提供することや受け持ち以外の患者から看護技術が習得できる環境を整えることにより、迷いなく積極的に患者に看護を提供できると考える。さらに、病棟カンファレンスや他職種などの連携に積極的に参加することにより、継続看護の重要性やチームとしての看護を学ぶことができる。そのために、実習指導者と教員は、学生の受け持ち患者を含めた学生の情報の共有が必要ではないかと考える。学生の技術習得を進めることや継続看護を学ぶことは、看護師を目指す上で重要なことである。しかし、実際には、患者にどこまでの高度な技術を提供できるのかなどの不安や病棟での実習という緊張がさまざまな迷いを生じる。その中で実習指導者や教員が学生の情報を共有し積極的に実習を行えるような環境の提供をしていくことが必要である。

また病棟には学生を「学ぶ者」という立場だけではなくチームの一員として考え、学生の豊かな発想や1人の患者を集中的に看護できるメリットなど学生の力の活用を期待する。このような支援を受けることで、実習という現場から、看護師になるために必要な知識や技術を“迷うことなく”学習していくことができると考える。学習への取り組みが、うまくいくことは、看護の重要性や意味、楽しさを実感し、職業人となってからの看護の姿勢へと繋がっていく。つまり、学生時代の充実した学習が将来の看護師への意識の改革にも繋がると考えている。

**キーワード** 看護学実習, 学生, 学習者支援

## はじめに

私が、学習支援として望むことは、「迷いのない学習環境」である。私はこれまでの実習の中でさま

ざまな場面で悩み、もっと迷いなく実習を行っていくことができればよかったのではないかと思うことがいくつもあった。そこで学習支援として望むことが3つある。臨床指導者や教員に対しては1. 学生

元 NHO 災害医療センター附属昭和の森看護学校3年 (現 NHO 災害医療センター 看護部)  
(平成21年4月6日受付, 平成21年10月21日受理)

Learning Environment in Which it Doesn't Hesitate

Taro Okano, SHOWA NO MORI School of Nursing, NHO Disaster Medical Center (present: NHO Disaster Medical Center)

Key Words: nursing science practice, student, support for nursing students

が実習中に経験のできる看護技術の提示と看護技術習得の基準統一，2. 受け持ち患者と学生の情報を共有するということである。そして病棟の方々に対しては，3. 患者への一貫した継続看護の重要性を学べるような場の提供である。

### 学生が実習中に経験できる看護技術の提示と看護技術習得の基準の統一

1つめは学生が実習中に経験のできる看護技術の提示と看護技術習得の基準を統一するということである。学生にとって3年間の間にさまざまな看護技術を体験していくことは臨床に出た際のイメージ化や適応にとって大切なことである。1回経験しているか、していないかの差は大きいと考える。学生の時期に1つでも多くの看護技術を体験したいと学生は日々考えながら実習に臨んでいる。しかし、受け持ち患者や病棟によって一定の看護技術しか体験できないこと、実習病棟によって経験のできるものに偏りがあることが現状である(図1)。

学年などの違いや目標によっても行える看護技術に制限があり、どの時期にどの看護技術を体験できるのかわからないことがある。その結果、3年の実習終了時に清拭や体位変換などの基本的な看護技術しか習得できていないことや、経験できるはずの看護技術を見学実習だけで終わらせてしまっているなどの現状がある。

また学生は実際に援助を行う際に未熟な技術で患者に援助を提供してよいのか、失敗して患者との信頼関係に影響がでてしまうのではないのかなどを考

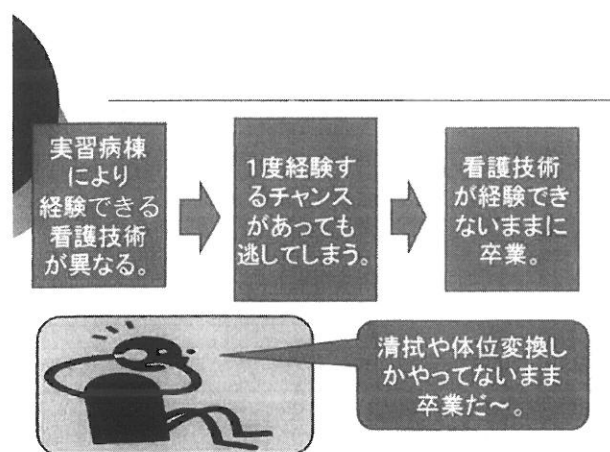


図1 学生が3年間に看護技術を習得できない例

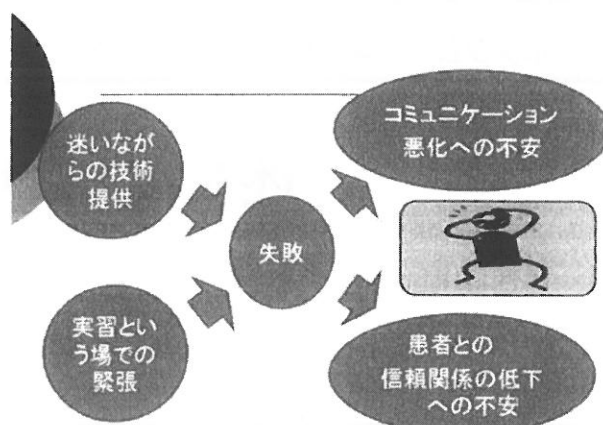


図2 学生の技術の習得への積極性の低下の要因

えてしまう。それに加えて実習という現場の緊張もあり、それらが積極的な技術習得の妨げの要因となってしまうのが実際である(図2)。

受け持ち患者や実習病棟によって技術習得に差がでてしまうこと、実習での緊張や患者との信頼関係に問題が生じてしまうことへの不安から積極的な技術習得に臨めないことの2つが問題としてあがってくる。

実際の例としては、初めて3週間実習を行ったことがある。直腸がんの患者を3週間受け持った。ストーマを造設した患者だったが、ストーマのケアに1度も関わるができなかった。初めての3週間実習という緊張、患者が創部からくる激痛と闘っている時に自身のケアがうまくいかずに患者に苦痛を与えてしまうのではないかなどの迷いが生じた。その結果ストーマのケアに関しては見学だけで終わってしまった。振り返ってみるとストーマのケアをすることは貴重な機会であり、行えばよかった、もっと積極的に取り組んでおけばよかったと後悔をした。そしてその時に実習指導者や教員から「大変だけど、貴重な経験だからやってみたら、頑張ってみよう」などの声かけや助言があったら、この技術を体験した方がよいのかなどの判断について考える余裕ができたのではないかと考えられる。

それに対する提案として、①その実習で学生が行える看護技術の提示、②卒業までに経験が必要な看護技術の統一をあげたい。①の提示は、その実習で経験できそうな看護技術を、受け持ち患者だけでは習得できる看護技術に限度がある可能性も考慮して、受け持ち以外の患者でも技術の習得を行えるように調整し、学生が経験できる技術を実習指導者や

教員から学生に提示してもらうことである。そういった提示により効率よく技術習得が進むのではないかと考える。②の看護技術の統一は学生の間には経験が必要なのか、卒業後の臨床での経験で大丈夫なのかなど項目の統一をすることにより、学生が何をやらなければならないのかが明確になり、積極的に看護技術の経験を行っていきやすくなるのではないかと考える。また卒業の前に経験をすることにより現場へのイメージを持ちやすくなることも考えられる。

### 実習指導者と教員による情報の共有

2つめは受け持ち患者と学生に対して実習指導者と教員が情報の共有をするというものである。学生は日々の援助や看護過程の展開について実習指導者や教員から指導を受けながら看護を患者に提供している。学生だけの考えでは援助を単独では行うことはできない。同様に健康問題への取り組みも学生が立てたものを実習指導者や教員と相談しながら取り組んでいく。したがって患者の状態や今どのような過程をたどっているのかを把握し、的確な助言や指導を学生は受けたいと思っている。指導や助言により、よりよい実習に繋がっていく。しかし現実には実習指導者同士の引き継ぎが行われていなかったり、実習指導者と教員の情報共有ができていなかったこと、実習指導者と教員の意見が異なり学生が板挟みになってしまう場面などがあった。学生の実習状況の情報を共有していなかったために、できるはずだった看護技術の実践を逃してしまったことや患者のライフスタイルに合わせた援助の提供ができなかったこと、健康問題に関して実習指導者と教員の意見の相違による板挟みなどが私自身にもあった。これらの問題により学生は患者の健康問題への取り組みが両者の意見の相違により不明確になり、日々の援助もどのようにしていけばよいのか方向性を見失ってしまい、迷いが生じる(図3)。

この問題に対する提案として、学生と学生が受け持っている患者についての情報をファイルなどで実習指導者や教員が共有してもらいたい。学生の学習の進行状況などを学生に関わる人たちが把握しやすくなることによって、健康問題の展開や日々の援助のフォローなどスムーズに進行していくことに繋がっていくのではないかと考える。



図3 実習指導者と教員の意見の相違

### 継続看護の重要性を学ぶ場の提供

3つめとして患者への一貫した継続看護の重要性を学ぶ場の提供ということをおこなう。実習の中で病棟が1つのチームとして、目標にむかって看護が行われているのか疑問な点があったり、患者カンファレンスで病棟や他職種の方々がどのように患者を捉えているのか、学生が参加していないのでわからないという場面があった。

私たちは就職すると臨床の現場に出て看護を患者に提供していく。しかし、実際の現場は私たち学生が実習で患者1人を受け持ち援助を行うこととは異なり、複数人の患者を受け持ち、勤務帯の看護を行い、次の勤務帯への引き継ぎを行っていきチームで1人の患者に関わっていくシステムになっている。しかし学生にとっては1人の患者に対してどのように継続した看護が行われているのかわかりにくい状況が生じている。本来、患者の入院から退院までの過程を、チームで共有し、患者へ継続看護を提供するものである。さらには他職種とも連携を図ったりしていくことも継続看護の重要な部分なので学生にとってこれらの理解はとても必要だと考える(図4)。

そこで、実際にどのように学生が患者の継続看護に関わっていくのがよいのか、それを考えた時の提案として、学生をチームカンファレンスなど他職種との連携の場に積極的に参加させてほしい。学生ということもあり、「学ぶ者」という位置づけではあるのだが、病棟で患者に関わっている以上、チームの1人ではないだろうか。したがって学生をチームの情報共有の場に参加させ、看護師同士あるいは他職種との生の情報交換を聞かせるのである。看護師同士が患者のどのような情報を共有し、どのような

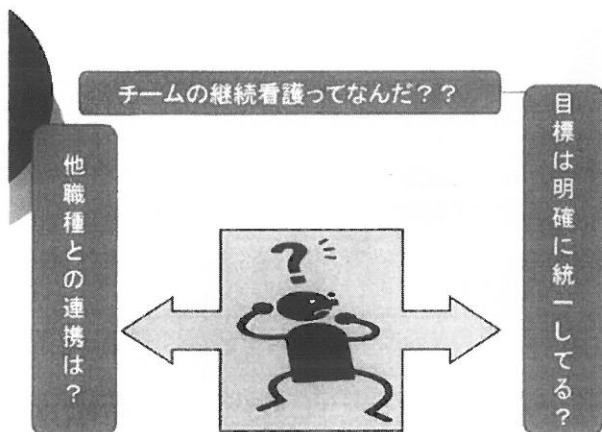


図4 継続看護の学びの難しさ

目標をもってチームが動いているのか、また他職種からどのような指示や希望が提示されるのかなど患者に対してチーム全体がどのように流動的に動いているのかを学生がみることができる。それにより、チームとして1人の患者に提供する継続看護の一貫性の理解ができるのではないだろうか。現場を肌で感じることで、将来の臨床の現場で自分がチームの一員としてどのように動くことがよいのか、チームの大切さを考えながら実習に取り組むことができる。

最後に学生の力を病棟の方々にぜひ活用をしてもらいたいということを伝えたい。前述したが、学生というのは、「学ぶ者」という位置づけがあるので、どうしても病棟の負担になってしまうというのが現

実の問題ではある。技術が未熟であったり、知識や経験なども乏しいことは事実である。しかし、学生だからこそ考えられる豊かな発想や患者1人を重点的にみることができるといったメリットもある。また学生が受け持つことによって患者の精神的苦痛の緩和を図ることも可能である。学生の力というのは未知な部分が多いが、確実にプラスになる部分もあるはずである。教育と実際の看護というものを切り離して考えがちであるが、学生を病棟のチームの一員と考え、病棟のプラスになるように教育を行っていくことが人材育成として大切なのではないだろうか。ぜひ学生の力を信じ、学生の教育にあたってほしいと強く願う。

### まとめ

これまで提案した学習環境の支援により、実習という現場から看護師になるために必要な知識や技術などを迷うことなく学習していけるのではないかと考える。

理想の看護師を目指し努力を重ねている学生にとって学生時代の看護への学習の取り組みがうまくいくことにより、看護の重要性や意味を理解でき、楽しさを実感し、職業人となってからの看護への姿勢も変化していくのではないかと、学生時代の充実した学習が将来の看護師への意識の改革になり、看護の地位の向上にも繋がると考える。